

青少年らしき

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

7月



「西日本豪雨災害から三年」

今回は、箭田まちづくり推進協議会委員の守屋美雪さんから表題についてお話を伺いました。守屋さんは、放課後子ども教室や学校ボランティアをはじめ、コミュニティ協議会でも活躍をされ、子どもだけではなく、地域住民のために、日夜元気に活動されています。

うとも感じました。

三年前の西日本豪雨災害のことを思い出すと、昨日のこのように今でも胸が締めつけられます。この思いは何年経っても変わることはないと思います。おそらく、東日本大震災で被害を受けた東北の人々も、あれから十年経ったからと言って、辛い思いは決して消えていないと思います。私は二万小学校へ避難できたのですが、真っ暗な中、冷たい水につかって、怖い思いをされた方は、どれほどのことだったろう



沢山の人がボランティアに駆けつけてくれました

翌日夜が明けて町を見ると、辺り一面が水浸しで、わが家は二階まで水がきていて、屋根しか見えない状態でした。その時、全身から力が抜けたのを覚えています。それまで毎日子どもを学校に送っていたのですが、この日からそれも全くなりませんでした。今まで青少年健全育成のために、いろいろやってきたのですが、一切何もできなくなることが辛かったです。子どもを中心にはまちづくりを考え、取り組んできたのですが、この災害を経験したことで、命を守る活動（命は何より大事ということ）、すなわち防災活動にも力を入れていきたいと考えるようになりました。

七月七日、豪雨災害翌日、私は二万

小の体育館で、地域の方々が物資を集めてくださったお陰で、朝顔も洗え、歯磨きもでき、さらには朝食もいただくことができました。日々当たり前にできることの喜びを改めて感謝しました。災害というのは、今まで積み上げてきたものが、一瞬にして音を立ててガラガラと壊れていきます。水没してしまっているわが家の姿を見た時、今後どうしたらいいのか不安でいっぱいでした。

周りの人の声掛けや、地域の人の思いやりに力をもらい、そして何より力づけてくださったのが、ボランティアの方々でした。赤の他人のわが家のために、朝から夕方まで、汗だくで泥まみれになって、家の片づけを行ってくれました。私はボランティアの方々から力をもらい、「これは、何があっても頑張らにやおえん。」と心の底から思いました。おそらく、直備町住人の皆さんは私と同じ思いだったと思います。ボランティアは倉敷市はもちろん、全国から来られました。特に「ピースボート」や「連合」の方々、中には台湾から来られた方々によって、打ちひしがれた気持ちから、やる気を取り戻しました。後からいろいろな人



「かきごおり」水彩（クレパス）（令和2年度）
倉敷市立箭田小学校 2年 池上 大喜
夏に自分で作ったかき氷がすごくおいしかったです。
ミルクをたっぷりかけたらあまくて冷たくて、口の中がしあわせいっぱい！



ボランティアセンターにも多くの
人たちが駆けつけてくれました。

「あちこちに噂が広まり、うちもやってもらいたい。」と連絡がありました。ボランティア



センターもすぐ機能し始め、現地拠点徐徐に増え、活動はどんどん広がっていききました。直備町、特に私の住む坪田地区は昔の家が多く、広い家のうえに高齢者が多いので自力で片づけはできませんでした。水を吸った畳は、一人では運び出せません。何とか頑張つて片づけている人でも、三日もすると疲れ果てて「もうどうにもならん。」と諦める方が多かったです。そこへボランティアの皆さんが一生懸命作業をしてくださるので、「こりゃ、わしらもやらんとおえん。」と元氣を出して頑張つておられました。日本各地から応援に駆けつけてくださり、八月末にはほぼ坪田地区は片づくまでになりました。ボランティアの方は服装から長靴まで、瓦礫に耐えられるような仕様でした。他地区でも学生さんが活躍してくれました。皆さんが熱い気持ちを持ってくれたのです。地区内の人々は感謝でいっぱいだったので、地区長名で感謝状を出させてもらいました。子どもたちも大変辛い思いをしたと

思います。箭田小の子は最初玉島小へ行かせてもらいました。今までは歩いて行けた学校に、朝早く起きて、バスに乗って行くわけです。乗り遅れるわけにはいけないので、学校に行くだけでも緊張感がつきまといきます。後に二万小の仮設校舎へ帰ってきたのですが、やはり自分の学校ではなかったので、気苦労もあったと思います。私も毎朝、通学支援のため信号の所に立っていました。バスの中の様子を信号の所から見ると、子どもは大あくびをしたり、寝ていたりして、「疲れているだろうな。」と感じました。それに、今までは学校の行き帰りは歩きだったものが、歩かない生活に慣れ始め、帰ってから外で遊べなくなってしまうなど、状態が変わったことで、子どもの顔から生気が失われていました。いつもだるそうな顔を見ると辛かったです。



高学年は、玉島高校でお世話になりました。



真備中は倉敷芸科大でお世話になりました。

三年間は、経つてみればあつという間でしたが、とにかくその時その時を、一生懸命前を向いて過ごしていました。でも、まだまだこれからです。今一番悩んでいることは、本当に困っている事が見えないことです。被災時も情報が入ってこなくて、避難せずに自宅に残っている人がいました。現在でも、生活が困窮している方もおられると思います。見守り隊の方々に一軒一軒回っていただいています。市から出ている生活情報など何も知らない方がいるのです。本当に困っている方の掘り起こしをやつていかなければならないと思っています。

ある時、コロナ感染症予防対策のために、ある団体がマスクを送つてきてくださいました。そのことを、箭田まちづくり推進協議会が発行している広報紙「ふれあい箭田」に掲載しました。小さな記事だったのですが、多くの皆さんから連絡をいただき、希望される方に、取りに来てもらいました。また、毛布も寄贈していただくことになり、注文を受けて地区の文化祭の時に配ることができました。ただ、文化祭に出て来れない方もいました。さらに、人目を気にされ、欲しいと手を挙げない方もおられます。それぞれの方の思いを聞きながら、こちらから声をかけないとだめだとも感じました。

今現在取り組んでいることは、小田川河川敷の樹木化防止のことです。河川をきれいにして一生つき合う。そして、減災活動を行うことは、亡くなられた方々への鎮魂にもつながることだと思います。また、防災教育も考えています。「一人も逃げ遅れを出さない」を合言葉に、地域づくり、人づくりを大人も子どもも一緒にやつていかなければならないと思っています。

「みんなが家族だ」という思いで、みんなで真備を創っていきましょう。

『出すぞ！』
直備の底力

